

# 『中觀五蘊論』の思想的背景について：『五蘊論』ならびに『入阿毘達磨論』との関係についての再考察

著者	横山 剛
雑誌名	真宗文化：真宗文化研究所年報
巻	25
ページ	23-42
発行年	2016-03-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1108/00000767/">http://id.nii.ac.jp/1108/00000767/</a>

## 論 文

# 『中観五蘊論』の思想的背景について

——『五蘊論』ならびに『入阿毘達磨論』

との関係についての再考察——

京都大学大学院博士課程

平成27年度真宗文化研究所研究員

横 山 剛

### はじめに

蔵訳でのみ現存する、月称(Candrakīrti, ca. 600–650)の『中観五蘊論』(*Madhyamakapañcaskandhaka*)は、中観派の論書でありながら、アビダルマ範疇論(いわゆる「五位七十五法」)の解説を趣旨とする特異な一書であり、中観派において議論されていた範疇論の内容を体系的に伝える貴重な資料である<sup>1</sup>。筆者は既に、同論の書名、著作目的、同論が説くアビダルマ範疇論の性格、中観派的な特徴、同論が後代の論書に与えた影響などについて考察を行ったが<sup>2</sup>、本稿では、同論の成立の背後に存在する論書や伝統について考察を行いたい。

瓜生津[1964]と池田[1985]は、世親(Vasubandhu, ca. 320–400 / 400–480)の『五蘊論』(*Pañcaskandhaka*)が『中観五蘊論』の範疇論の骨格に影響を与え、塞建陀羅(\*Skandhila, 世親と同時代)の『入阿毘達磨論』(*Abhidharmāvātāra*)が、心所法の構成を中心に、範疇論の内容に影響を与えたことを指摘する<sup>3</sup>。また、瓜生津[1978]は、『中観五蘊論』に『俱舍論』と逐語的に一致する解説が複数確認され、『中観五蘊論』が『俱舍論』の解説を借用していることを指摘する。これらの先行研究における指摘は、概ね適切なものであり、筆者もそれに同意する。しかし、『中観五蘊論』とこれらの論書の関係を考察する際には、各論書における解説全体を総合的に比較、検討しなければならない

ために、当然のことながら、全ての問題点が検討されたというわけではなく、指摘や考察がなされないまま、残されている点も少なくない。特に『中観五蘊論』と『五蘊論』『入阿毘達磨論』の関係については、これまでの研究では、諸法の構成などの構造的な分析と共通点の指摘に重きが置かれており、解説の細部や相違点に対する検討や考察は必ずしも十分ではない。

また、最近では、『中観五蘊論』のテキストを取り巻く状況にも進展が見られる。拙稿 [2014b] で指摘した通り、アバヤーカラグプタ (Abhayākara Gupta, ca. 11–12 c) の『牟尼意趣莊嚴』(*Munimatālaṅkāra*) における一切法の解説は『中観五蘊論』に基づくものであり、『牟尼意趣莊嚴』の当該部分の梵文テキスト (李・加納 [2015]) が刊行されたことで、同論の梵文から『中観五蘊論』の原文を一定の割合で回収することが可能となった。この『牟尼意趣莊嚴』からの情報を用いれば、『中観五蘊論』の解説を原文を意識しながら読解することが出来る。本稿では、これらの先行研究の成果を踏まえながら、『中観五蘊論』と『五蘊論』『入阿毘達磨論』の関係について再考し、『中観五蘊論』の思想的な背景や特徴に関わる点を中心に、未だ指摘や検討をされていない問題点に考察を加えたい。

## 1. 『中観五蘊論』と『五蘊論』の関係について

### 1.1. 書名、範疇論の骨格、論書の構成について

まずは『中観五蘊論』と『五蘊論』の関係から考察を始めたい。両論の蔵訳は冒頭で *Phuñ po lña'i rab tu byed pa* (Pañcaskandhaprakaraṇa) という同一の書名を示す。池田 [1985] は、蔵訳が示す書名を『中観五蘊論』が『五蘊論』を意識して著された根拠の一つとする (pp. 24–25)。しかし、最近では『五蘊論』の梵文原典や安慧釈の研究が進み、『五蘊論』の原題が Pañcaskandhaka である可能性が高いことが指摘された。一方で『中観五蘊論』に関しても、拙稿 [2015a] で指摘した通り、本来の書名は Pañcaskandhaka であった可能性が高い<sup>4</sup>。したがって、両論の書名は、蔵訳が示す書名とは異なる Pañcaskandhaka

という書名で一致することになる。

次に、両論における範疇論の骨格を比較してみたい<sup>5</sup>。『中観五蘊論』が説く範疇論は、五蘊、十二処、十八界を骨格とする。蘊処界を組み合わせた範疇論の解説は、『阿毘曇甘露味論』、『阿毘曇心論』、『雑阿毘曇心論』、『俱舍論』という有部論書の史的展開の中で徐々に整備され、定式化されてゆくが、アビダルマ範疇論の解説を趣旨とする論書で以上の骨格を初めて採用した論書が世親の『五蘊論』であり、同論はアビダルマ範疇論の展開史において重要な位置を占める。したがって、同じく蘊処界の下で範疇論を解説する『中観五蘊論』が骨格の点で『五蘊論』の影響を受けたとする先行研究の指摘は妥当であろう。

一方で、論全体の解説の構成に関しては、両論の間に差が見られる。アビダルマ範疇論の解説を趣旨とする論書を扱う場合には、範疇論の構造や構成（法体系）と論全体の解説の構成（シノプシス）を混同しないように注意が必要である。『五蘊論』は、蘊処界の解説を終えた後に、『俱舍論』「界品」の後半部に見られるような十八界を用いた有色無色などの諸門分別を解説する<sup>6</sup>。したがって、『五蘊論』は、五蘊、十二処、十八界の解説だけではなく、それに諸門分別を加えた四つの部分から構成されているといえよう<sup>7</sup>。しかし、『中観五蘊論』は、諸門分別を解説せず、蘊処界の解説の結びの直後に、同論においては諸法の詳細な分類を省略することを宣言する<sup>8</sup>。以上の諸門分別に関する両論の差異からは、『中観五蘊論』の解説の性格について二つの情報を読み取ることが出来る。一点目は、『中観五蘊論』が蘊処界という範疇論の骨格だけではなく、諸門分別を含めた論全体の構成においても『五蘊論』を意識しているということである。『中観五蘊論』自体は諸門分別を説かないが、蘊処界の解説の結びの直後に来る詳細な分類の省略についての言明は、『五蘊論』における解説の構成を前提としたものと考えられる。二点目は、『中観五蘊論』において諸法の諸門分別に重きが置かれていないということである。師 [2015] (pp. 271–272) が指摘するように、世親は『五蘊論』において、範疇論を解説する際のアビダルマの伝統に則って、十八界による諸門分別を含めて範疇論の略説を行っているが、『中観五蘊論』の作者は、定義を始めとする諸法の基本

的な内容に的を絞って略説を行っている<sup>9</sup>。このように共に範疇論の略説を趣旨とする小論であっても、両論の解説には性格の差が見られる<sup>10</sup>。そして『中観五蘊論』が解説を諸法に関する基本的な教理に絞っているという点は、拙稿 [2015b]、[2016] で指摘した、初学者を無我の理解に導くための基礎教学としてのアビダルマ範疇論の略説という同論の趣旨に沿うものであるといえよう。

## 1.2. 解説について

続いて、解説という点から『中観五蘊論』と『五蘊論』の関係を考えてみたい。『俱舍論』から借用した解説が『中観五蘊論』の随所に見出されることが先行研究によって指摘されているが、『中観五蘊論』には『五蘊論』に類似する解説も見出すことが出来る。その一例として、無想定 (*asaṃjñīsamāpatti*) の解説を以下に示す。

### 『中観五蘊論』における無想定の解説

'du śes med pa'i<sup>1)</sup> sñoms par 'jug pa gañ ze na / dge rgyas kyi 'dod chags dañ  
bral ba goñ ma'i ma yin pa ñes par 'byuñ ba'i 'du śes sñon du btañ ba'i yid la  
byed pas sems dañ sems las byuñ ba'i chos 'gog pa gañ yin pa'o //

<sup>1)</sup>pa P (MPSk, C 262a1–2, D 265b1–2, G 363b3–4, N 293b2–3, P 304a4–5; LINDTNER [1979] p. 142, ll. 20–23)

無想定とは何か。遍浄天の貪欲を離れてはいるが、[それよりも] 上の [貪欲を離れてい] ない者にとっての、出離の想が先行する作意による、心と心所法の止滅である<sup>11</sup>。

### 『五蘊論』における無想定の解説

asañjñīsamāpattiḥ katamā / śubhakṛtsnavītarāgasya nordhvaṃ niḥsaraṇasañjñāpūrvava  
keṇa manasikāreṇāsthāvarāṇām cittacaitasikānām dharmānām yo nirodhaḥ /

(PSk, p. 14, ll. 7–9; 師 [2015] pp. 207–210)

滅尽定や無想などにおいても、両論の間にこのような類似した解説が見られる。先に示した書名などにおける両論の関係を考えれば、これらの解説も『五蘊論』によるものであると考えるのが自然であろう。しかし、これらの法に關しては、無著 (Asaṅga, ca. 310–390 / 395–470) の『阿毘達磨集論』 (*Abhidharma-samuccaya*) にも、類似する解説が見られる<sup>12</sup>。この点を考慮すれば、『俱舍論』からの解説の借用とは異なり、瑜伽行派において共有されていた解説を『中観五蘊論』が踏襲している可能性も考慮しなければならない。

## 2. 『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』の關係について

### 2.1. 行蘊の構成に見られる相違点について

ここからは『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』の關係について考察を行う。まずは、両論が説く範疇論の構成の相違点から検討を始めたい。『中観五蘊論』における諸法の構成を以下に示す。なお、『入阿毘達磨論』に含まれない法を太字で表記するものとする。

#### 【五蘊】

〔色蘊〕〔大種〕地～風界〔大種所造〕五根、五境、無表

〔受蘊〕

〔想蘊〕

〔行蘊〕〔心相応行〕思、触、作意、欲、勝解、信、精進、念、定、慧、尋、伺、放逸、不放逸、厭、欣、輕安、**不輕安**、害、不害、慚、愧、捨、**解脱**、善根、不善根、無記根、九結 (愛～慳)、縛、隨眠 (九十八)、隨煩惱 (誑、憍、害、惱、恨、諂)、十纏 (昏沈～覆)、漏、暴流、軛、取、繫、蓋、十智 (法智～無生智)、忍

〔心不相応行〕得、非得、無想定、滅尽定、無想、命根、衆同分、依得、事得、処得、生、異、住、無常、名身、句身、文身、縁不  
和合、縁和合

〔識蘊〕

【十二処】眼処～身処、色処～触処、意処、法処（三無為の解説を含む）

【十八界】眼界、色界、眼識界～眼界、法界、意識界

先行研究が指摘する通り、両論が説く範疇論における諸法の構成は、行蘊の心相応行を中心に、強い一致を見せる<sup>13</sup>。『中観五蘊論』は『入阿毘達磨論』が挙げる諸法をすべて含み、順序も一致する。したがって、『中観五蘊論』に『入阿毘達磨論』からの影響を想定するのは自然であろう。一方で、両論における諸法の構成には相違点も見られる。『中観五蘊論』の行蘊には『入阿毘達磨論』には見られない以下の八法が含まれる。

〔心相応行〕 不軽安、害、解脱

〔心不相応行〕 依得、事得、処得、縁不和合、縁和合

ここからは『中観五蘊論』に見られるこれらの諸法について、置かれている位置や範疇論における役割などを考察してみたい。本来は、八法すべてについて考察を行うべきであるが、紙幅の都合上、本稿では心相応行の三法のみを検討し、心不相応行の五法については、別稿において検討することを予定している。

心相応行の尋から無記根にかけては、尋と伺のように、対概念や対立概念の関係にある諸法が、その関係性を意識した順序で、説かれている。心相応行の並びにおける以上の傾向を考慮すれば、不軽安 (*aprasābhdhi*) は、軽安の対立概念として<sup>14</sup>、害 (*vihimsā*) は、不害の対立概念として、置かれたと考えられる。特に、害の解説は、以上の状況を反映している。『入阿毘達磨論』では、害は随煩惱の三番目の要素として一箇所だけで解説されるが<sup>15</sup>、『中観五蘊論』では、随煩惱の三番目の要素として解説される他に、ここで問題となっているように、心相応行の十九番目の要素としても解説される<sup>16</sup>。この二箇所における害の解説は、心相応行の二十番目の要素である不害の直前に害を対立概

念として補ったためであると考えられる<sup>17</sup>。

解脱 (vimukti) は、心相応行としては他のアビダルマ論書に例を見ない要素である<sup>18</sup>。『中観五蘊論』における解説は以下の通りである。

nam par grol ba ni sems kyi dri ma dañ bral ba ste / ñon moñs pa rab tu spañs  
pas nam par grol ba zes bya ba'i sems las byuñ <sup>1</sup>ba'i chos 'byuñ<sup>1</sup> ba gañ gi  
sams dri ma dañ bral bar gyur pa de nam par grol ba'o //

<sup>1</sup>)om. C (MPSk, C 253a1-2, D 256a2-3, G 350a4-5, N 282b5-6, P 293b5-6;  
LINDTNER [1979] p. 124, ll. 24-27)

解脱とは、心が汚れを離れることである。煩惱を完全に断じることで解脱という心所法が生じる。それにより心が汚れを離れるものが解脱である。

上述の心相応行の並びにおける傾向を考えると、直前の捨 (upekṣā) と関係から挿入されたとも考えられるが、『中観五蘊論』の解脱と捨の解説からは、二法の関係を読み取ることは難しい<sup>19</sup>。一方、『牟尼意趣莊嚴』の解説は、この解脱という心相応行について、新たな解釈の可能性を示す。アバヤーカラグプタは『中観五蘊論』から借用した定義の直後に、善 (kuśala) の解説を挿入してしており、解脱を後続の善根と結びつけて理解しようとしているように見える<sup>20</sup>。『牟尼意趣莊嚴』における解脱の解説は以下の通りである。

vimuktiś cetaso vaimalyaṃ kleśādiprahāṇe sati vimuktir nirvāṇaṃ nāma caita-  
siko dharma utpadyate / tatra kṣemārthaḥ kuśalārthaḥ / vimuktiś ca sakalopadrava-  
niṣṭītirūpatvān niṣparyāyeṇa kuśalam ārogyavat / mārgasatyam tu tatprāpti-  
hetutvāt kuśalam / tadanyat tu satyadvayaṃ sāsravam iṣṭavipākatvena sarūpa-  
bimbābhinirvartanāt / (MMA, p. 24, ll. 3-7)

解脱とは、心が垢れを離れた状態である。煩惱などが排除されたときに、



解脱—すなわち涅槃—という名の心所法が生じる。〔以下で述べる〕その中で、善 (kuśala) とは、安穩 (kṣema) の意味である。そして、解脱 (つまり滅諦) とは、あらゆる災厄の停止を本質とするので、絶対的に善である。無病のように。一方で、道諦は、それ (解脱) を得る原因であるので、善である。他方、それ以外の二諦 (苦諦と集諦) は、有漏である。なぜなら〔苦諦と集諦は、凡夫にとって〕望ましい異熟をもたらすゆえに、〔現世の自分と〕類似した似姿を〔来世に〕生じさせるからである<sup>21</sup>。

以上の解説では、解脱の定義が述べられた後に、仏教における最終目標である解脱が絶対的に善であることが説かれる。その後は、四諦という観点から解説が続き、解脱に至る道である道諦も善であり、苦諦と集諦については有漏であると説かれる。そして、この後、解説は善根へと続くことになる。このように、『牟尼意趣莊嚴』の解説を参考にすれば、解脱は後続の善根との関係からこの位置に置かれたとも考えることが出来るが、『中観五蘊論』における解脱と善根の解説からは、やはりこの二法の関係を読み取ることは難しい<sup>22</sup>。また『牟尼意趣莊嚴』における理解を『中観五蘊論』に適用できるかという点についても注意が必要である。上述の『牟尼意趣莊嚴』の解説については、解釈の一例として考えるべきであり、『中観五蘊論』の心相応行における解脱については、不明な点が残る。

## 2.2. 解説の相違について

続いて、解説という点から『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』の関係を考えてみたい。池田 [1985] は、範疇論における諸法の構成という点で、両論の間に強い一致が見られることを指摘する中で、「もっとも、それぞれの法の解説は必ずしも全てにわたって一致するわけではない」(p. 37) と、両論における解説の相違についても言及するが、本稿では、両論の解説における相違を、改めて強調しておきたい。諸法の構成における強い一致を見ると、解説においても逐語的な一致が数多く見られることが予想されるが、両論の間に見られる並

行箇所は限られており、解説全体から見れば、あくまで部分的であるといえよう。したがって、両論の間で顕著な一致が見られるのは、範疇論における諸法の構成（法体系）と、解説の構成（シノプシス）の一部までである点に注意が必要である<sup>23</sup>。

ここでは、解説における相違点の中から、両論の思想的な立場の差を端的に示すものとして、諸法の実在論証に注目したい。『入阿毘達磨論』は、実在性が論争的になる諸法に関して、教証と理証を用いて、その実在性を論証する。同論における実在論証を整理すれば、以下の通りである。

実在論証の項目	理証 <sup>24</sup>	教証
色蘊		
色彩と形態	なし	D 303a3, P 393b7; T, vol. 28, 980c21.
無表	D 304a3, P 395a1; T, vol. 28, 981a27-28.	D 304a3-4, P 395a2; T, vol. 28, 981a28-29.
行蘊(心不相応行)		
得	D 316b5-6, P 409b6-8; T, vol. 28, 986b2-6.	D 316b7-317a1, P 409b8-410a3; T, vol. 28, 986b6-12.
命根	D 318b7-319a1, P 412a5-6; T, vol. 28, 987b1-4.	D 318b5-7, P 412a3-5; T, vol. 28, 987a24-28.
衆同分	D 319a3, P 412b1; T, vol. 28, 987b13-16.	D 319a4-5, P 412b2-4; T, vol. 28, 987b10-11.
生	D 319a6-7, P 412b5-6; T, vol. 28, 987b20-23.	D 319b3-5, P 413a2-4; T, vol. 28, 987c6-8.
住	D 319b1, P 412b7; T, vol. 28, 987b26-27.	
異	D 319b1-2, P 412b7-8; T, vol. 28, 987b28-c2.	
無常	D 319b2-3, P 413a1; T, vol. 28, 987c4-5.	
名句文身	なし	D 320b2-4, P 414a1-3; T, vol. 28, 988a7-11.

無為法		
虚空	D 321b6, P 415b1-2; T, vol. 28, 988b26-27.	D 321b6-322a1, P 415b2-4; T, vol. 28, 988b27-c1.
摂滅 <sup>25</sup>	なし	D 322b1-323a2, P 416a4-b6; T, vol. 28, 988c18-27.
非摂滅	なし	D 323a4-5, P 417a2-4; T, vol. 28, 989a8-12.

このように『入阿毘達磨論』は、説一切有部の教理に基づき、諸法の実在性を強く意識した論書であるといえる。以上の性格は、同論が範疇論の骨格として採用する、三無為を前面に押し出した八句義（\*aṣṭapadārtha）という体系からも窺うことができよう。一方で『中観五蘊論』は、以上の教証と理証を一つも含まず、実在論証をすべて省略する。以下に両論における虚空（ākāśa）の解説を例として示す。

『中観五蘊論』における虚空の解説

de la nam mkha' gañ že na / gañ gzugs rnams kyi go 'byed ciñ gzugs med pa  
ni nam mkha'o //

(MPSk, C 263a2-3, D 266b3, G 365a4, N 294b5-6, P 305a8; LINDTNER  
[1979] p. 145, ll. 3-5)

その〔三無為の〕中で、虚空とは何か。諸色の空間であり、色が存在しないことが虚空である<sup>26</sup>。

『入阿毘達磨論』における虚空の解説

nam mkha' ni bsags pa'i rdzas skye <sup>(1)</sup>ba de <sup>(1)</sup>skabs 'byed <sup>(2)</sup>pa'i bdag ñid do <sup>(2)</sup> //  
de med du zin na bsags pa'i rdzas mi skye ba kho nar 'gyur ro //

kye gau ta ma sa ci la brten / bram ze gser gyi dkyil 'khor la'o // gser gyi  
dkyil 'khor ci la brten <sup>(3)</sup> chu la'o // chu ci la brten <sup>(4)</sup> rluñ la'o // rluñ ci la

brten / rluñ nam mkha' la'o // kye gau ta ma nam mkha' ci la brten / bram  
 ze ha cañ thal ches te / dri ba<sup>5)</sup> rnams kyi mtha' rtogs par mi nus par 'gyur  
 ro // 'on kyañ snañ ba yod pas nam mkha' mñon no // nam mkha' ni gzugs  
 med pa / bstan du med pa / thogs pa med pa yin na / de ci la brten par 'gyur  
 'on kyañ snañ ba yod pas nam mkhar śes so źes<sup>6)</sup>  
 bde bar gśegs pas kyañ gsuñs so // nam mkha'i dños po'o //

<sup>1)</sup>ba'i G <sup>2)</sup>pa de'i bdag ñid ni nam mkha'o CDP <sup>3)</sup>om. CD <sup>4)</sup>om. CD <sup>5)</sup>ma P  
<sup>6)</sup>om. CD (AA, C 323a1-3, D 321b6-322a1, G 520a1-4, N 427b1-4, P 415b1  
 -5; 櫻部 [1997] pp. 236-237)

虚空は、集積した実体が生じる空間を与えることを本性とする。これ（虚  
 空）が存在しないならば、集積した実体は決して生じないであろう。

おお、ゴータマよ、大地は何に依拠するのか。婆羅門よ、〔大地は〕  
 金輪に〔依拠する〕。金輪は何に依拠するのか。水〔輪〕に〔依拠す  
 る〕。水〔輪〕は何に依拠するのか。風〔輪〕に〔依拠する〕。風  
 〔輪〕は何に依拠するのか。風〔輪〕は虚空に〔依拠する〕。おお、ゴ  
 ータマよ、虚空は何に依拠するのか。婆羅門よ、行き過ぎ〔た問い〕  
 である。問いの終わりを知らることが出来なくなってしまう。光がある  
 ことによって、虚空を知る。虚空は無色であり、無見であり、無対で  
 ある。それは何に依拠しようか。光があることで、虚空を知るのであ  
 る<sup>27)</sup>。

と善逝も説いた。〔以上が〕虚空句義である<sup>28)</sup>。

『中観五蘊論』における実在論証の省略は、アビダルマ範疇論に対する同論の  
 理解を反映している。拙稿 [2015b]、[2016] で指摘した通り、『中観五蘊論』  
 は、初学者を無我の理解へと導くために、知の入口としてアビダルマ範疇論を  
 解説するが、その一方で、法無我、すなわち、諸法の無自性を主張し、相互依  
 存的な関係（例えば、四大種同士や識と認識対象の相互関係）を理由に、諸法

の自性を否定する。このように、諸法の自性に対する『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』の見解は対照的であり、实在論証を解説に含めるか否かという相違点は、両論の思想的な立場の違いを表しているといえよう。

## お わ り に

本稿では、『中観五蘊論』と『五蘊論』ならびに『入阿毘達磨論』との関係について再考した。『中観五蘊論』と『五蘊論』の関係については、書名、範疇論の骨格、解説の構成という複数の点から両論を比較し、特に、諸法の諸門分別を含むか否かという点において、両論に差が見られることを指摘した。また『五蘊論』を始めとする瑜伽行派系の論書と共通する解説が『中観五蘊論』に見られることを指摘した。『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』の関係については、両論の心相応行の構成要素における相違点として、不軽安、害、解脱の三法について考察を行った。さらに、解説における相違点の中から、諸法の实在論証の有無に注目し、両論の思想的な立場の違いが表れていることを指摘した。

「はじめに」でも述べた通り、『中観五蘊論』とこれらの論書との関係を考察する際には、各論書の全体を総合的に比較、検討することが求められるために、本稿の内容をもって全ての問題点が検討されたわけではない。心不相応行における五つの法を始めとして、今後も、共通点と相違点という二つの観点から、細かな問題点を検討していく必要がある。また『牟尼意趣莊嚴』の情報を頼りに、『中観五蘊論』の解説の細部を見てゆくと、これまでに指摘されていない論書からの影響も確認される。『中観五蘊論』とこれらの論書との関係については、分析を継続し、別稿にて報告することを予定している。

### 略号一覧 Abbreviations

AA	<i>Abhidharmāvatāra</i>
AKBh	<i>Abhidharmakośabhāṣya</i>
AKVy	<i>Abhidharmakośavyākhyā</i>

AS	<i>Abhidharmasamuccaya</i>
C	Co ne edition of the Tibetan Tripiṭaka
D	sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka
G	dGa' ldan edition of the bsTan 'gyur in the Tibetan Tripiṭaka
MMA	<i>Munimatālaṃkāra</i>
MPSk	<i>Madhyamakapañcaskandhaka</i>
N	sNar than edition of the Tibetan Tripiṭaka
P	Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka
PSk	<i>Pañcaskandhaka</i>
T	<i>Taishō Shinshū Daizōkyō</i> 『大正新脩大藏経』

## 参考文献 Bibliography

### 一次文献 Primary Sources

*Abhidharmakośabhāṣya*

(Skt.) PRADHAN [1967]

*Abhidharmakośavyākhyā*

(Skt.) WOGIHARA [1936]

*Abhidharmāvatāra*

(Tib.) C *ñu* 303a5–324a7, D (4098) *ñu* 302a7–323a7, G (3598) *thu* 490a–522a6, N (3590) *thu* 403b–429, P [119] (5599) *thu* 393a3–417a8.

(Ch.) T, vol. 28 (1554) 980b20–989a19.

*Abhidharmasamuccaya*

(Skt.) GOKHALE [1947]

*Madhyamakapañcaskandhaka*

(Tib.) C *ya* 236a7–263a7, D (3866) *ya* 239b1–266b7, G (3266) *ya* 326a–365b3, N (3258) *ya* 264a6–295a3, P [99] (5267) *ya* 273b6–305b5.

*Munimatālaṃkāra*

(Skt.) 李・加納 [2015]

(Jap.) 李ほか [2015]

*Pañcaskandhaka*

(Skt.) LI and STEINKELLNER [2008]

(Jap.) 師 [2015]

『中阿含経』

(Ch.) T, vol. 1 (26) 421a1–809c14.

### 研究一覽 Modern Studies

BAUDDHAKOŚA PROJECT TEAM バウツダコーシャ・プロジェクトチーム

- [2014] 「śraddhā/saddhā の訳語をめぐって」, 『仏教文化研究論集』 17, pp. 3–64.
- GOKHALE, V. V.  
[1947] “Fragments from the Abhidharmasamuccaya of Asaṅga, *Journal of the Royal Asiatic Society, Bombay Branch*,” New Series 23, pp. 13–38.
- IKEDA, Rentaro 池田練太郎  
[1985] 「Candrakīrti 『五蘊論』 における諸問題」, 『駒澤大學佛教學部論集』 16, pp. 588–566.
- LI, Xuezhū 李学竹 and KANO, Kazuo 加納和雄  
[2015] 「梵文校訂『牟尼意趣莊嚴』第一章—『中觀五蘊論』 にもとづく一切法の解説 (fol. 48r4–58v1) —」, 『密教文化』 234, pp. 7–44.
- LI, Xuezhū et al. 李学竹ほか  
[2015] 「梵文和訳『牟尼意趣莊嚴』—一切法解説前半部—」, 『インド学チベット学研究』 19, 近刊.
- LI, Xuezhū 李学竹 and STEINKELLNER, Ernst  
[2008] *Vasubandhu's Pañcaskandhaka*, Sanskrit Texts from the Tibetan Autonomous Region, No. 4, China Tibetology Research Center and Austrian Academy of Sciences, Beijing-Vienna.
- LINDTNER, Christian  
[1979] “Candrakīrti's Pañcaskandhaprakaraṇa, I. Tibetan Text,” *Acta Orientalia* XL, pp. 87–145.
- MORO, Shigeki 師茂樹  
[2015] 『『大乘五蘊論』 を読む』, 春秋社, 東京.
- PRADHAN, Prahlad  
[1967] *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*, Tibetan Sanskrit Works Series, Vol. VIII, K. P. Jayaswal Research Institute, Patna, First ed. (2nd ed. 1975)
- URYUZU, Ryushin 瓜生津隆真  
[1965] 「中觀仏教におけるボサツ道の展開—チャンドラキールティの中觀学説への一視点」, 『鈴木学術財団年報』 1, pp. 63–77.  
[1978] 「中觀学派におけるアビダルマ—月称造『五蘊論』 管見」, 『國譯一切經印度撰述部月報 三藏集』 第三輯, 大東出版社, 東京, pp. 185–192. (初出『國譯一切經印度撰述部月報三藏』 116 (毘曇部第二十四卷), 大東出版社, 1976)
- WOGIHARA, Unrai 荻原雲来  
[1936] *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra*, Sankibo Buddhist Book Store, Tokyo.
- YOKOYAMA, Takeshi 横山剛  
[2013a] “The Real Existence of *Pratiṣamkhyānirodha*: The *Māṇuśyakasūtra* as Scriptural Evidence in the *Abhidharmāvatāra*”, 『印度學佛教學研究』 61-3, pp. 110–114.  
[2013b] 「塞建陀羅造『入阿毘達磨論』 成立考—『俱舍論』 との先後関係をめぐって—」, 『佛教史學研究』 56-1, pp. 1–21.

- [2014a] 「『入阿毘達磨論』の原題に関する考察—蔵訳仏典が伝える書名中の“rab tu byed pa” (prakaraṇa) の意味をめぐって—」, 『日本西藏學會々報』 60, pp. 1-14.
- [2014b] 「『牟尼意趣莊嚴』(Munimatālamkāra) における一切法の解説—月称造『中観五蘊論』との関連をめぐって—」, 『密教文化』 233, pp. 51-77.
- [2015a] “A Reconstruction of the Sanskrit Title of Candrakīrti’s *Phuṅ po lña’i rab tu byed pa*: with Special Attention to the Term “rab tu byed pa”, 『印度學佛教學研究』 63-3, pp. 208-212.
- [2015b] 「『中観五蘊論』における諸法解説の性格—無我説との関係をめぐって—」, 『密教文化』 235, 近刊.
- [2016] “An Analysis of the Textual Purpose of the *Madhyamakapañcaskandhaka*: With a Focus on its Role as a Primer on Abhidharma Categories for Buddhist Beginners”, 『印度學佛教學研究』 64-3, pp. 164-168.

注

- 1 『中観五蘊論』に関する基本的な情報や問題点については、パウツダコーシャ・プロジェクトチーム [2014] の注 45-47 と拙稿 [2015b] の注 1、2 を参照。
- 2 拙稿 [2014b]、[2015a]、[2015b]、[2016] を参照。
- 3 『入阿毘達磨論』の書名については拙稿 [2014a] を、有部論書の発展史における位置づけについては、拙稿 [2013b] を参照。
- 4 『中観五蘊論』の原題は Pañcaskandhaka であるのだから、本来は「五蘊論」と呼ぶのが適切であろうが、拙稿において提案した通り、世親の『五蘊論』との混同を避けるために、「中観」(madhyamaka) の語が付された後代における書名を用いるものとする。
- 5 『中観五蘊論』と『五蘊論』における範疇論の骨格の比較については、池田 [1985] pp. 31-32 の対照表を参照。同研究は、以上の二論書に、『入阿毘達磨論』も加えて、構造の異同を比較する。
- 6 PSk, p. 20, l. 13-p. 23, l. 8; 師 [2015] pp. 271-298.
- 7 十八界の解説が終わった直後に十八界に基づく諸門分別が説かれるので、一見すると諸門分別は十八界の解説に含まれるように見える。実際に Li and STEINKELLNER [2008] は『五蘊論』を三つの部分 (A: 五蘊、B: 十二処、C: 十八界) に分けて校訂している。しかし、同論では、蘊処界を解説する目的 (PSk, p. 20, ll. 10-12; 師 [2015] pp. 268-270) が説かれた後に、諸門分別が始まっている。したがって、蘊処界を骨格とする範疇論が解説された後に、十八界を用いてそれ以前に説かれた諸法の諸門分別が行われていると考える方が自然であろう。
- 8 『中観五蘊論』の十八界から結びの偈頌の直前までの解説は以下の通りである。

mig la sogs pa'i skye mched de dag ñid rten la sogs pa'i bye brag gis<sup>1)</sup> dbye na khams  
 bco brgyad du 'gyur te / rten drug dañ / dmigs pa drug dañ / nmam par śes pa drug gi  
 dbye bas so // phuṅ po dañ<sup>2)</sup> skye mched dañ / khams rnams kyi mdor bsdus pa ni



bśad zin to // rgyas par dbye ba ni *Chos mñon pa dañ bsres pa*<sup>3)</sup> las śes bar bya'o //

<sup>1)</sup>gi C <sup>2)</sup>om. NP <sup>3)</sup>pas G (MPSk, C 263a4–5, D 266b4–5, G 365a5–6, N 294b6–295 a1, P 305b1–3; LINDTNER [1979] p. 145, ll. 10–15)

他ならぬそれらの眼などの処を、拠り所などの区別により分類すれば、十八界となるのであって、六つの拠り所（根）と、六つの認識対象と、六つの識の区別による。蘊処界の要約を解説し終えた。詳しい分類は *Chos mñon pa dañ bsres pa* に従って知るべきである。

Cf. MMA: manaāyatanam saptadhā bhivvāśtādaśa dhātava ucyante / cakṣurdhātū rūpa-dhātūś cakṣurvijñānadhātūr yāvan manodhātūr dharmadhātūr manovijñānadhātūr ity āśrayaṣṭkālabanaṣaṣṭkaviṣayaṣaṣṭkabhedād ity uktā aṣṭādaśasvalakṣaṇadhāraṇārthena dhātavaḥ // (p. 39, ll. 16–19)

「詳しい分類は *Chos mñon pa dañ bsres pa* に従って知るべきである」の部分は『中観五蘊論』が説くアビダルマ範疇論の系統を知る上で重要であるが、*Chos mñon pa dañ bsres pa* がいずれの論書を指しているのか明らかでない。LINDTNER 本も *chos mñon pa dañ bsres pa* をイタリックにしており、書名と考えているようであるが、具体的な論書については言及がない。sutralāpaka が *mdo dañ bsres pa* と訳されることを参考にすれば、*abhidharmalāpaka* という原語を想定することもできるが、そのような書名の論書は知られていない。或いは、書名とは見ずに、例えば「アビダルマとの混合に従って」などと読む可能性も考えられるが、疑問が残る。

- 9 筆者がここで述べているのは、『中観五蘊論』においては、その性格上、諸門分別が説かれていないということであり、『中観五蘊論』の作者や中観派が諸門分別を始めとするアビダルマの詳細な議論を軽んじているということ述べているのではない点に注意されたい。むしろ、本稿の注8に示した通り、蘊処界の解説の結びの直後の一節からは、参照先は不明であるが、諸門分別を始めとするアビダルマ範疇論の詳細な教理の学習についても、一定の配慮がなされており、中観派がアビダルマにおける詳細な教理や議論を否定していないことが窺われる。
- 10 本稿で扱う『中観五蘊論』、『五蘊論』、『入阿毘達磨論』の蔵訳が示す書名には、いずれも *rab tu byed pa* (*prakaraṇa*) の語が付され、教理を略説する小論というこれらの論書に共通する性格が反映されている。しかし、インドにおける書名が *prakaraṇa* という語を含んでいたかという点については検討を要する。蔵訳の書名における *prakaraṇa* の語に関しては、拙稿 [2014a] を参照。
- 11 『入阿毘達磨論』が『中観五蘊論』に与えた影響は、解説そのものにおいては、必ずしも顕著ではないということは、本稿の第二章で指摘するが、無想定無想定の解説はその好例である。『中観五蘊論』の解説は以下に示す『入阿毘達磨論』の解説よりも、『五蘊論』の解説に近い。

bsam gtan gsum pa'i 'dod chags dañ bral ba / bsam gtan bzi pa'i sa pa<sup>1)</sup> sems dañ  
sems las byuñ ba<sup>2)</sup> 'jug pa dañ mi mthun pa mi ldan pa'i chos ni<sup>3)</sup> 'du śes med pa'i  
sñoms par 'jug pa źes bya'o // sems dañ sems las byuñ ba thams cad 'gag<sup>4)</sup> kyañ 'du śes  
'jig pa'i sgo nas de bskyed pas 'du śes ñid du ston te / pha rol gyi sems śes pa bzin no //

<sup>1)2)3)</sup> CD insert /. <sup>4)</sup> 'gags CD (AA: C 319a1-2, D 318a1-2, G 514a4-6, N 422b6-423a  
1, P 411a5-7; 櫻部 [1997] pp. 228-229)

Cf. AA (Ch.): 已離第三靜慮染未離第四靜慮染第四靜慮地心・心所滅有不相應法名  
無想定。雖滅一切心・心所法而起此定專爲除想。故名無想。如他心智。(T, vol. 28,  
986c25-28)

Cf. MMA: asaṃjñīsamāpattiḥ śubhakarītsnavītarāgasyopary avītarāgasya nihsaraṇasaṃ-  
jñāpūrvakeṇa manasikāreṇa yaś cittacaitānāṃ dharmāṇāṃ nirodhaḥ // (p. 34, ll. 13-14)

12 AS: asaṃjñīsamāpattiḥ katamā / śubhakarītsnavītarāgasyo [parya]vītarāgasya nihsaraṇasaṃ-  
jñāpūrvakeṇa manasikāreṇāsthāvarāṇāṃ cittacaitasikānāṃ dharmāṇāṃ nirodhe asaṃjñī-  
samāpattir iti prajñaptiḥ / (p. 18, ll. 23-25)

13 『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』における心所法の構成の比較については、池田  
[1985] pp. 33-36の対照表を参照。同研究は、以上の二論書に、『五蘊論』も加えて、  
心所法の構成を比較する。

14 MPSk, D 255b2-4, P 293a4-6.

15 AA, D 311a4-5, P 403b1; T, vol. 28, 984a24-25.

16 MPSk, D 262a2, P 300a8; D 255b4, P 293a6-7.

17 不害については、『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』は共に、心相応行の要素（前  
者では二十番目、後者では、不軽安と害がないので、十八番目）として、一度だけ説  
かれる（MPSk, D 255b4-5, P 293a7; AA, D 306b6-7, P 398a7-8）。

18 瓜生津 [1978] (p. 190, 下段) は、行蘊に含まれる解脱について、『俱舍論』「界  
品」の「戒、定、慧、解脱、解脱知見蘊という五つの中で、戒蘊は色蘊に含まれる。  
残りは行蘊に含まれる」(AKBh: p. 17, l. 24-p. 18, l. 2) という教説を紹介するが、詳  
細については、不明とする。

19 『中観五蘊論』における捨の解説は以下の通り。

<sup>1)</sup> yañ sems las byuñ ba'i chos gañ dañ ldan pas sems dmigs pa'i yul la 'bad pa med par  
mñam du 'jug pa de ni sems mñam pa ñid de btañ sñoms źes brjod do // de ni 'di ltar  
yul la rjes su chags pa yañ ma yin / khoñ khro ba yañ ma yin no // de yañ de ni rnam  
pa gñis te / so sor brtags<sup>2)</sup> pa'i btañ sñoms dañ / so sor ma brtags pa'i btañ sñoms so //  
dgra bcom pa'i śes par gtogs pa ni so sor brtags pa'i btañ sñoms so // so so'i skye bo'i  
mi śes pa'i rjes su soñ ba ni so sor ma brtags pa'i btañ sñoms so //

<sup>1)</sup> C inserts *de*. <sup>2)</sup> *btags* GP (MPSk, C 252b6-253a1, D 255 b 7-256a2, G 350a2-4, N  
282b3-5, P 293b2-5; LINDTNER [1979] p. 124, ll. 16-23)

また、それと結びつくことで心が認識対象である対象に努力なしに等しく働く心所法が心が平等であることであり、捨と言われる。それは、すなわち、[心を]対象に執着せず、攻撃することもない。また、それは二種である。考察（釈）による捨と考察によらない捨である。阿羅漢の智（*jñāna*）に従うものが考察による捨であり、凡夫の無智（*ajñāna*）に従うものが考察によらない捨である。

Cf. MMA: *yena dharmēṇa cittaṃ ālambane saṃvartate / sā cittasamatā upekṣā // tayā hi cittaṃ nānuniyate na pratihanyate // sā cārhatāṃ jñānānugatā pratisaṃkhyayopekṣā / pṛthagjanānāṃ tv ajñānānugatāpratisaṃkhyayopekṣā //* (p. 23, l. 17–p. 24, l. 1)

- 20 筆者は、『牟尼意趣莊嚴』の一切法解説の研究を進める中で、解脱の解説が後続の善根の解説に結びつく可能性について見落としていたが、部派仏教研究会の第三回会合（2016年1月、東京大学仏教青年会）において、一色大悟氏（東京大学特任研究員）からご指摘を頂いた。この場にて同氏のご指摘に感謝を申し上げたい。
- 21 以上の和訳は、李ほか〔2015〕による（印刷中につき頁数未定。解脱の項目を参照）。また、この解説において、冒頭の *vimuktiś . . . utpadyate* の部分は、『中観五蘊論』の解脱の解説によるものであるが、それに続く善の解説については、並行する解説が『中観五蘊論』の不放逸の解説（MPSk, D 255 a1–b1, P 292b1–293a2）に見られる。『中観五蘊論』は、不放逸の解説において、同法を善法の修習と定義し、それに続いて、善の意味を説明するが、この善の解説は『中観五蘊論』独自の解説というわけではなく、『俱舍論』『業品』における解説（AKBh, p. 202, ll. 5–17）を借用したものである。
- 22 『中観五蘊論』における善根の解説は以下の通り。

dge ba'i rtsa ba ni gsum ste / ma chags pa dañ / že sdañ med pa dañ / gti mug med pa'o // de la ma chags pa ni sred pa'i gñen por gyur pa'i chos dños po'i don la <sup>1)</sup>zen pa'i<sup>1)</sup> mtshan ñid do // že sdañ <sup>2)</sup>med pa ni khoñ khro ba'i gñen po'i chos sems can rnam la sems rsub pa med pa'i mtshan ñid do // gti mug med pa ni ma rig pa'i gñen po'i chos śes rab kyi ño bo'o // 'di dag ni<sup>3)</sup> rañ gi<sup>4)</sup> bdag ñid kyañ dge ba yin la / dge ba gzan rnam kyi yañ rtsa bar gyur par dge ba'i rtsa ba ste / 'di ltar śiñ rnam kyi rtsa ba 'dab ma la sogs pa skye ba dañ gnas pa dañ 'phel ba'i rgyur gyur pa ltar / de bzin du dge ba'i chos thams cad kyi rtsa bar dge ba'i <sup>5)</sup>rtsa ba<sup>5)</sup> gsum po 'di dag ñid śes par bya'o //

<sup>1)</sup>sic read *zen med pa'i*. <sup>2)</sup>C inserts /. <sup>3)</sup>zi P <sup>4)</sup>gis G <sup>5)</sup>om. GNP (MPSk, C 253a2–4, D 256a3–5, G 350 a5–b2, N 282b6–283a2, P 293b6–294a1; LINDTNER [1979] p. 124, l. 28–p. 125, l. 9)

善根は三〔種類〕であり、無貪、無瞋、無癡である。その中で、無貪とは、渴愛と対立する法であり、事物に対して執着しないことを特徴とする。無瞋とは、恚（*pratigha*）と対立する法であり、有情に対する荒々しい心を有さないことを特徴とする。無癡とは、無明と対立する法であり、慧を本性とする。これら（三善

根)は、それ自体善でもあり、他の善にとつての根でもあって、善根である。木の根が、葉などが生じ、存続し、成長することの因であるように、一切の善い事柄の根であるとこれらの三善根を知るべきである。

Cf. MMA: *trīṇi kuśalamūlāni / alobho 'dveṣo 'mohaś ca / tatrālobhas tṛṣṇāpratid-  
vamdvibhūto dharmah padārthānabhiniveśalakṣaṇah / adveṣah pratighavirodhī dharmah  
sattveṣv arūksatālakṣaṇah / amoho 'vidyāvirodhī dharmah prajñāsvabhāvaḥ / ete svayaṃ  
kuśalā anyakuśalānām mūlabhūtā vṛkṣamūlavad utpattisthitivṛddhietavaḥ /* (p. 24, ll. 9  
-13)

- 23 本稿の1.1. で述べたように、『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』の関係を考察する場合にも、範疇論の構成（法体系）だけでなく、論全体の解説の構成（シノプシス）という点からも、考察を加える必要がある。解説の構成を比較するためには、両論の全体にわたるシノプシスを対照する必要があるため、この場において詳しく検討することはできないが、以下に共通点と相違点の例を挙げておく。両論の随眠の解説では、「随眠の語義解釈」（MPSk, D 261a5-6, P 299b3. AA, D 309b7-310a1, P 402a1-3; T, vol. 28, 983c5-11）、「随眠が生じる順番」（MPSk, D 261a6-b 4, P 299b4-300a2. AA, D 310b3-311a1, P 402b6-403a4; T, vol. 28, 983c29-984a14）、「煩惱が生ずる原因」（MPSk, D 261b4, P 300a2-3. AA, D 311a1-2, P 403a4-6; T, vol. 28, 984a14-18）が解説されるが、これらは『中観五蘊論』が諸法の構成ばかりでなく、解説の構成の点においても『入阿毘達磨論』の影響を受けていることを示す好例である。ただし、ここで述べているように、これらの共通項目における解説が、必ずしも逐語的に一致するわけではない点には注意が必要である。両論の解説の構成が異なる点としては、「六因、五果、四縁」の解説に注目したい。この点は、両論の思想的な立場の違いを考える上でも、興味深い。『入阿毘達磨論』は、五蘊（すなわち、有為法）の解説が終わった直後に、諸法の関係性として、六因、五果、四縁を解説する（AA, D 320b7-321b6, P 414a8-415b1; T, vol. 28, 988a21-b24）。一方、『中観五蘊論』は六因などの解説を行わない。これには主に二つの理由が考えられる。一つ目は、先に述べた、解説を諸法についての基本的な事項に絞り込もうとする『中観五蘊論』の略説の性格である。二点目は、この後に指摘する、諸法の自性を否定しようとする『中観五蘊論』の思想的な傾向である。同論は、本質的には、中観派の立場に立つために、諸法の自性を前提とする六因、五果、四縁の解説を行わなかったとも考えることが出来る。
- 24 『入阿毘達磨論』の実在論証における理証はすべて「この法がなければ、...という過失に陥る」という帰謬法の形式をとる。以上は簡潔な解説を旨とする『入阿毘達磨論』の性格によるものであると考えられる。
- 25 『入阿毘達磨論』における「人経」（*Mānuṣyakaśūtra*）用いた釈滅の実在論証については、拙稿 [2013a]、[2013b] を参照。
- 26 Cf. MMA: *yo dharmo 'nyān dharmān nāvṛṇoty anyair vā nāvriyate tad anāvāraṇam  
avakāśadāṭṭh bhṛṣam asyāntaḥ kāśante bhāvā ity ākāśam gaganam / asphuṭam asphāraṇīyaṃ  
rūpagatena //* (p. 38, l. 21-p. 39, l. 2)

27 Cf. AKVy: uktam hi bhagavatā / pṛthivī bho gautama kutra pratiṣṭhitā / pṛthivī brāhmaṇa abmaṇḍale pratiṣṭhitā / abmaṇḍalam bho gautama kva pratiṣṭham / vāyau pratiṣṭhitam / vāyur bho gautama kva pratiṣṭhitah / ākāśe pratiṣṭhitah / ākāśam bho gautama kutra pratiṣṭhitam / atisarasi mahābrāhmaṇāṭisarasi mahābrāhmaṇa / ākāśam brāhmaṇāpratiṣṭhitam anālabanam iti vistarah / tasmād asty ākāśam iti vaibhāśikāḥ / (p. 15, ll. 27–32)

Cf. 『中阿含經』「阿伽羅訶那經」：梵志即復問曰。瞿曇。地何所依住。世尊答曰。地依水住。梵志即復問曰。瞿曇。水何所依住。世尊答曰。水依風住。梵志即復問曰。瞿曇。風何所依住。世尊答曰。風依空住。梵志即復問曰。瞿曇。空何所依住。世尊答曰。空無所依。但因日月。故有虛空。(T, vol. 1, 682a6–12)

28 Cf. AA (Ch.)：容有礙物是虛空相。此增上力彼得生故。能有所容受是虛空性故。此若無者諸有礙物應不得生。無容者故。如世尊說。梵志。當知。風依虛空。婆羅門曰。虛空依何。佛復告言。汝問非理。虛空無色無見無對。當何所依。然有光明虛空可了。故知實有虛空無爲。此體若無風何依住。說無色等言何所依。因有光明何所了別。了龜毛等不因比故。(T, vol. 28, 988b25–c3)